



Title	性的マイノリティ (LGBTQ+) と建築
Author(s)	森, 傑
Citation	センターレポート, 52(1), 20-23
Issue Date	2022-04-01
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/84999
Type	journal article
File Information	Cent Repo.220.20-23.pdf



性的マイノリティ（LGBTQ+）と建築

森 傑 北海道大学大学院工学研究院・教授

1. はじめに

ユニバーサルデザイン。今日この言葉を知らない人はまずいない。日本でもようやく市民権を得たといえるが、その理念や定義は何となく感覚的に捉えていることも多いと思う。建築の分野では、しばしばバリアフリーデザインとの違いが強調される。

バリアフリーデザインは、障害者を含む高齢者等が、社会生活に参加する上で支障となる物理的な障害や精神的な障壁を取り除くためのデザインと説明される。

一方のユニバーサルデザインは、文化・言語・国籍や年齢・性別・能力などの違いにかかわらず、できるだけ多くの人々が利用できることを目指すデザインをいう。つまり、そのまま素直に解釈すると、“全ての人々にとって使いやすいデザイン”ということになる。

しかし、観念的には理解できたとしても、バリアフリーデザインではなくユニバーサルデザインになるためには、具体的に何をどうすべきか正直よくわからないと感じることも少なくないはずだ。筆者も、私たちの社会が取り組むべき課題や目標という視点でいえば、ユニバーサルデザインは漠然とした言葉だと考えている。

筆者はむしろ「インクルーシブデザイン」を意識している。インクルーシブ (inclusive) / インクルージョン (inclusion) とは「包摂・包括」を意味し、その反対はエクスクルージョン (exclusion / 排除) である。インクルーシブデザインとは、ユーザーの多様性を理解することで、意思決定の情報や利用の機会を提供し、できるだけ多くの人を取り込むことに貢献するデザインである。

2. 多目的トイレはUD?

本稿の執筆中に、オーストラリアの建国記念日(1月26日)に関する記事に目がとまった¹⁾。「建国記念日は「侵略の日」でもある」との見出しで、「先住民にとっては『侵略の日』として記憶されており、全国民が祝福できるよう別の日に変更すべきとの声も高まっている」とあった。

筆者は、本誌2019年冬号にて「シドニー滞在記～7カ月間のノマド生活を通じて～」を寄稿し、

オーストラリアのマイノリティへの社会意識の高さを紹介した²⁾。オーストラリアの流刑植民地から連邦国家へ至るまでの歴史は複雑で、その過程で支配者と先住民あるいは移民同士^{あつれき}の軋轢や衝突を経験し続けてきたことが、今日のマイノリティへの意識の高さにつながっている。

例えば、新しい駅舎や公共施設では、個室が並んだユニセックス (unisex) 仕様のトイレが標準となりつつある (写真1)。ユニセックス的な考え方 (gender-neutral) は、デパートなどのおもちゃ売り場へも及ぶ。いわゆる男の子用と女の子用という分類での商品の陳列を禁止している。

また、スーパーでは Quiet Hour (刺激の少ない静かな時間帯) という取り組みも始まっている。自閉症の子どもとその家族が来店しやすいように店内の照明の明るさを抑え、店員の作業も控える時間を設けるというものである。

さて、写真1のサインにある「RH」という表記の意味はわかるだろうか。これは Right Hand の略である。利き手によっての使いやすさがトイレへ入る前にわかるようにするためである。オーストラリアではこれが当たり前だが、日本ではまず見かけない。

筆者がこのサインを初めて見て感心したのは10年以上前になるが、ようやく筆者が携わった建築でも実現することができた。上土幌町の「道の駅かみしほろ」である (写真2)³⁾。日本でも医療や福祉の関連施設で利き手が配慮された仕様のトイレはあるが、いわゆる不特定多数が利用する施設でサインも含めて整備されているのは「道の駅かみしほろ」が唯一ではないかと思う。

写真3は「道の駅かみしほろ」のトイレのサイン、図1は平面詳細図である。同規模の施設でこのように多目的トイレが二つ並んで計画されることは



写真1 シドニーの公衆トイレのサイン

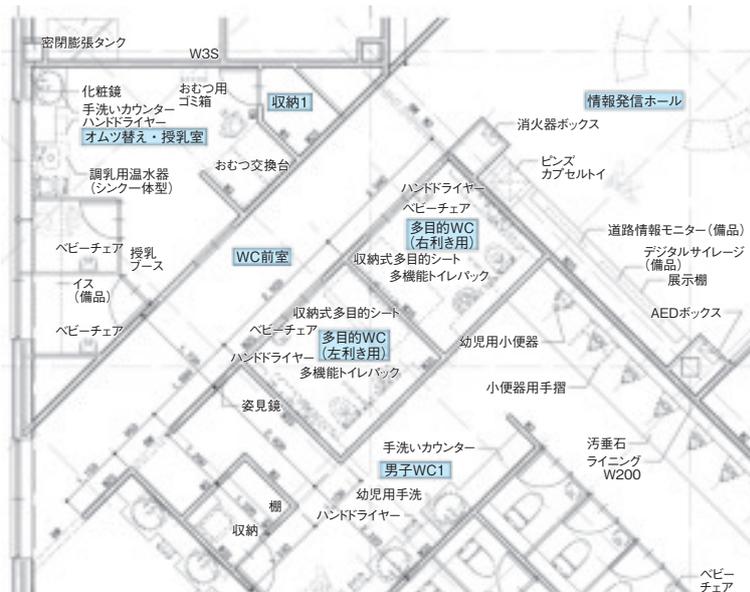


図1 「道の駅かみしほろ」のトイレの平面詳細図

まずない。大抵は建設費が増えることから多目的トイレは一つ用意すれば良いと判断するし、それでユニバーサルデザインができているとするはずだ。しかし、インクルーシブデザインとして意識するとどうだろうか？

この二つのトイレを余計なコストと考えるのか否か。上土幌町には、ソーシャルインクルージョン (social inclusion/社会的包摂) への真摯な姿勢のもと、道の駅が町民そして訪問者の意識の醸成へ貢献できる空間となるべく、このトイレの価値に賛同いただいた。

3. LGBTQ+への認知

ここ数年で認知度が高まった言葉の一つが「LGBT」だ。レズビアン (Lesbian/女性同性愛者)・ゲイ (Gay/男性同性愛者)・バイセクシュアル (Bisexual/両性愛者)・トランスジェンダー (Transgender/心と身体の性が一致していない人) の頭文字をとった、性的マイノリティの総称である。

最近では、自身の性自認や性的指向が定まっていない、もしくは定めていないセクシュアリティを指すクィア (Queer) やクエスチョニング (Questioning) を含めて「LGBTQ+」と表記されることも増えている。

特に昨年の東京オリンピック・パラリンピック以降は、国際的にも社会的な関心と意識が加速しているように感じる。アメリカのコミック誌『スーパーマン』の息子ジョン (自身もスーパーマン) は、バイセクシュアルであることを明らかに



写真2 「道の駅かみしほろ」の外観



写真3 「道の駅かみしほろ」のトイレのサイン



写真4 「Rainbow Vision」の外観

した。作家のトム・テイラー氏は「より多くの人が、最もパワフルなスーパーヒーローの中に自らを見いだすことができる」とコメントしている⁴⁾。また、コミック誌原作の新作映画『Batgirl』では、トランスジェンダー俳優がトランスジェンダーのキャラクターを演じるとのことだ。

筆者が「建築計画」の講義でLGBTを取り上げ始めたのは、実は15年ほど前になる。授業で毎年紹介しているのが、アメリカのニューメキシコ州サンタフェの郊外住宅地「Rainbow Vision」である (写真4)。サンタフェは、アメリカの中で歴史的に性的マイノリティに対して寛容であったため、全米から多くの人に移り住むようになった。

サンタフェではLGBTが特別視されることなく社会で活躍し生活してきたが、2000年頃から高齢化が顕著になってきた。LGBTの人々は子どもを持たなかったり親族と疎遠であったりするケースが多く、高齢化に伴う生活の不安を抱えることも多い。

「Rainbow Vision」は、コンドミニウムとアパートメントおよびアシステッド・リビングからなる住宅地であり、リタイアしたLGBTが安心して生活できる環境の実現を目指している。ただ、イ

ンクルーシブな都市と社会として、LGBTが特定のエリアに集まって住み、その場所が建築的に強調されることについては、筆者は否定的だ。

5~6年ほど前までは、「Rainbow Vision」を授業で紹介すると、教室の空気が一瞬で変わっていた。学生は、まるで触れてはいけない・聞いてはいけないものに戸惑っているような、奇妙な反応と表情をしていた。「森先生って、実は…」という声さえ間接的に聞こえてきた。読者も自覚していると思うが、まさにこれがつい最近までの日本の社会だったのだ。

筆者もかつてはそうだった。2003~04年にアメリカのウイスコンシン大学ミルウォーキー校に滞在していたとき、ランチの席で「パートナーを連れてきた」とさっと紹介され驚いたことを記憶している。それは“カミングアウト”などと強調するものではなく、ごく自然なコミュニケーションだった。日本も劇的に変わりつつあるが、自然な空気になるまでにはもう少し社会の成熟が必要だと思う。

筆者の研究室では、マイノリティに関わる研究を継続的に行っている。例えば、授乳室やオムツ交換台といったスペースを利用するのは母親のみではないという問題意識から、商業施設の親子休憩室のあり方を論考したものや⁵⁾、ムスリムの人々の買い物や食事、公共施設の利用の広がりや

偏りを分析し、生活拠点を構築する上での工夫や課題を明らかにしたものがある⁶⁾。

2018年には、LGBTが日常生活の中で不都合だと感じる場面に着目し、自身の性を自覚する契機となる空間の特徴について分析を行った⁷⁾。

例えば、結婚式のような異性愛中心主義の空間や、宿泊施設のように同性愛に排他的な空間、飲食店のようにプライバシーが露呈する空間、パブリックスペースのように他者との接触機会の予測が困難な空間、病院や公衆トイレのような生理的空間、公衆浴場のように性差が強調される空間、が明らかとなった(図2)。

この研究結果をもって直ちに具体的な建築の計画や設計に結びつけることは難しいが、まず大事なのは、性的マイノリティへの理解を深めることだと考えている。

4. おわりに

東京オリンピック・パラリンピックでは様々な失言が世間をにぎわした。日本全体の認識や意識がまだまだ途上であることを露わにしたわけだが、社会の常識や価値観が変わっていくということは、常に自分自身が古くなっていくということでもある。

これまでの経験や知識、特に教育によって刷り込まれた常識はそう簡単に拭い去ることはできない。ジェンダー平等が謳われて久しいが、世代が

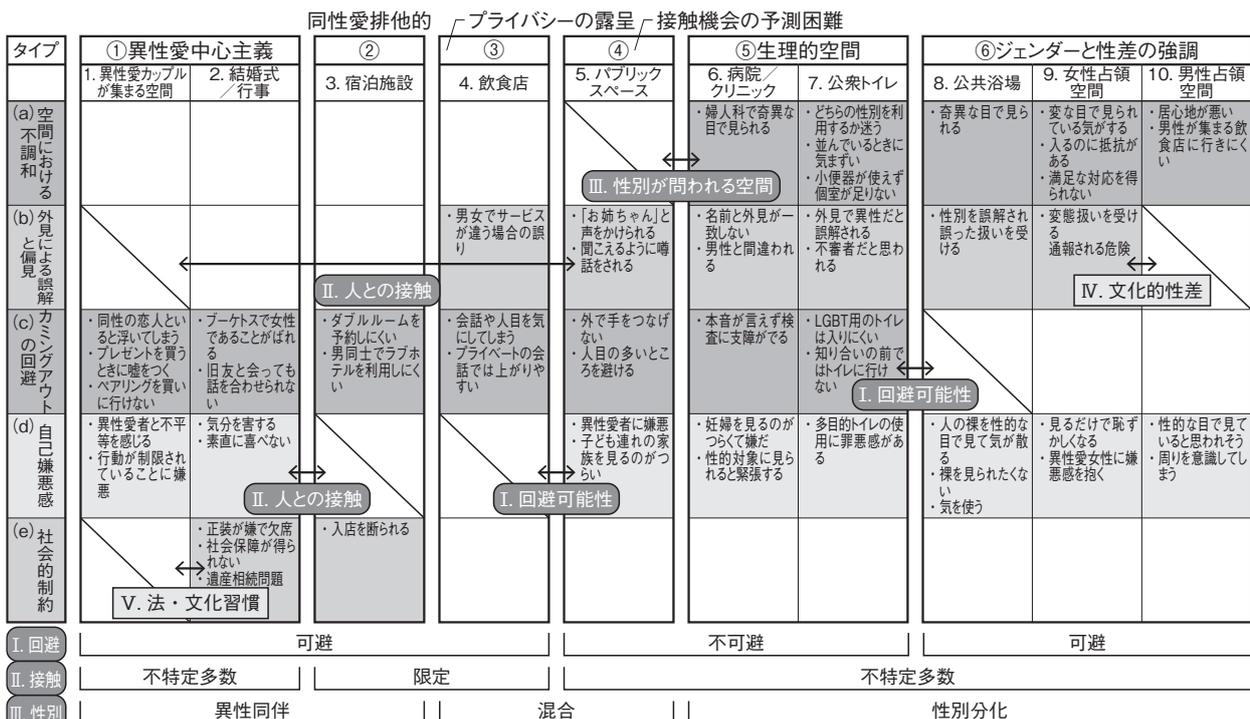


図2 LGBTが語る不都合が生じる場面の空間と要因

異なると、頭でわかっているにもかかわらず感覚的にはわかっていないことも少なくない。

筆者自身も例外ではない。筆者の子どもに「今日は女の子らしい服装だね」と何気なく声をかけたところ、即座に「ジェンダー問題だ!」と突っ込まれたことがある。その日ちょうど学校の授業で「SDGs (Sustainable Development Goals/持続可能な開発目標)」を扱ったらしい。今の小中学生はこれが当たり前なのだと感心するとともに、自身が経験した義務教育とのギャップも痛感した。

言葉狩り的な状況は決して望ましくないが、自身の理解や認識が社会の変化とともにアップデートできているのかどうかを、常に意識的に反省することが大事だと思う。建築に携わる専門家としても、その業界に染みついた当たり前で社会と建築を見ていることがしばしばある⁸⁾。社会とともにある建築の常識をこれからも問い直し続けたい。

〈参考文献〉

- 1) オーストラリア歴史問題 建国記念日は「侵略の日」でもある、ニューズウィーク日本版、2022.1.31
- 2) 森傑、シドニー滞在記〜7カ月間のノマド生活を通じて〜、センターレポート、北海道建築指導センター、通巻第207号、pp.20-25、2019.1
- 3) 道の駅かみしほろ、<https://karch.jp/michinoeki/>
- 4) 「スーパーマン」はバイセクシュアル 最新号で友人と恋仲に、朝日新聞、2021.10.12
- 5) 田才知未・森傑、男女共同参画からみた親子休憩室の実態と課題 札幌市内における商業施設を対象として、日本建築学会計画系論文集、第76巻、第666号、pp.1379-1388、2011.8
- 6) 橋富一博・森傑・野村理恵、札幌市におけるムスリムの日常生活拠点とその地理的特徴、日本建築学会大会学術講演梗概集・建築デザイン発表梗概集 (CD-ROM)、ROMBUNNO.7244、2017.7
- 7) 岡本碩也・森傑・野村理恵、LGBTが日常生活で直面する性を自覚する空間の性質 札幌市在住の当事者が語る不都合が生じる場面に着目して、日本建築学会大会学術講演梗概集・建築デザイン発表梗概集 (CD-ROM)、ROMBUNNO.5417、2019.7
- 8) 森傑 (編著)、岩佐明彦・栗山尚子・小松尚・野村理恵・松原茂樹 (著)、建築計画のリベラルアーツ 社会を読み解く12章、朝倉書店、2022.4

